

## 緊急事態宣言の解除

みなさん、こんにちは。2020年度の春学期が5月7日から始まりしました。例年より約1か月遅れての開始です。そして、すべての科目が遠隔授業で始まっています。開始から3週間(4回目への突入)が経とうとしています。4~5月は日本国民にとって(もちろん世界にとって)、大変な毎日でした。緊急事態宣言が出され、外出の自粛や施設の使用制限など、感染の拡大を防止するため、これまでの生活とは全く異なる毎日を送りました。そして本日、「北海道と京浜周辺地域」に残されている「緊急事態宣言」が全ての地域で「解除」されました。努力の結果、罹患者が減っているとの報告で、素直に嬉しく思いました。



しかし、これからが肝心です。感染者がゼロになった訳ではありません。感染拡大を予防する「新しい生活様式」で感染の拡大を防止すべく、定着が求められています。簡単に言えば、引き続き人と人との接触を減らす努力が必要だということです。厚生労働省が公表した実践例には、実に46項目もの提案が並んでいます。その中に、「家に帰ったらまず手や顔を洗う」というのがありますが、これは非常に重要だと思います。理由は動画でご説明しておりますので、ぜひご覧ください。厚生労働省が公表した「実践例」ですが、「ただちに全てを守るのは難しい」というのが正直な感想です。大切なのは習慣化し、続けることだと思います。無理せずに生活することが求められています。

もう一つ、気になることがあります。それは、アメリカ国立アレルギー感染症研究所のファウチ所長が「感染者の増加が少し見え始めて、大流行をもたらすのを懸念している」と発言したことです。ファウチ氏は、12日、議会上院の公聴会で、拙速な経済再開は、第2波を招きかねないと、警鐘を鳴らしたのです。また、韓国では、「クラブの集団感染で検査待ちの人が急増し、安心できません(5月12日)」とニュースになり、規制を緩めた国々で、第2波への懸念がされています。日本も例外ではありません。北海道は、独自の「緊急事態宣言」を出し、感染拡大を抑え込んだかに見えました。しかし、4月に入って札幌市を中心に、病院などで、クラスターが相次ぎ、「第2波」の感染拡大が、懸念されています。今、私たちが一致団結して正しいと考えられる行動を続け、「第2波」の感染拡大を阻止しなければならないのです。

今回の新型コロナウイルス感染症の感染流行・拡大で我々がわかったことは、たった一つのウイルスが日本社会を、そして、社会をどれだけ混乱させるかということです。実は、この繰り返し押し寄せる感染拡大の深刻さを、人類はすでに100年前にも、経験していました。スペイン風邪という、インフルエンザウイルスのパンデミックが起こっています。第一次大戦さなかの1918年春、アメリカから始まったとされる、インフルエンザの大流行です。アメリカから軍艦で、ヨーロッパの戦場に向かう兵士たちによって、運ばれたウイルスは、各地で感染爆発を引き起こしながら、世界中に広がったとされています。大戦のさなかにあつた国々は、ウイルス感染による戦力低下が、敵国に知られるのを恐れ、情報を封印したようです。この結果、感染に拍車がかかったとの記述があります。アメリカから始まったとされるのに、なぜスペイン風邪と言うのでしょうか？それは、戦中、中立を保っていたスペインが、インフルエンザ大流行を、報道したことから、「スペイン風邪」と呼ばれているようです。この「スペイン風邪」には、ある特徴が指摘されています。1918年の春から夏にかけて、米国とヨーロッパを中心に感染を広めたスペイン風邪ですが、夏場、いったん小康状態に入ったあと、秋の訪れと共に、再び欧米を中心に、爆発的な感染をもたらしたそうです。流行は一度で終わらず「第二波」「第三波」と繰り返したのです。「スペイン風邪」が繰り返された理由には諸説ありますが、第2波が、インフルエンザが流行しやすい寒い時期と重なったことは説得力があります。「スペイン風邪」に関する報告書で有名なものに、大正11年に内務省衛生局から出されたものがあります。その中に、「患者数は前流行に比し約其の十分の一に過ぎざるも、其病性は、遙に猛烈にして、患者に対する、死亡率非常に高く…」とあります。簡単に言うと、第2波の致死率は、第1波の4倍以上に跳ね上がったのです。



スペイン風邪が今でも話題に登るように、今回の新型コロナウイルスのパンデミックは、100年後、200年後、あるいは、それ以上に亘って語り継がれると思います。私たちは、その歴史の生き証人であり、一人一人が歴史を創る当事者でもあります。後世の人達が、今私た

ちが行っている事(経験)を良い意味で教訓としてくれるような生き方をしていくことが求められているように思います。新型コロナとのせめぎ合いに、何が何でも勝たなくてはなりません。

まだまだ不自由な生活が続きますが、生活を元に戻すのではなく、さらに進化させることを考えましょう。そして、中部大学に集う全ての学生(生徒も)と教職員で生活を新しくしていきましょう。

最後に、学生サポートセンターは、「居場所」をつくり、学校と社会の統合を目指します。できるところからできるだけ、スタッフ一丸となり、進めていきます。よろしくお願いします。

学生サポートセンター長 伊藤 守弘(5月25日)

#### 参考文献

感染症の世界史 石 弘之(著) KADOKAWA (2018/1/25)

人類と感染症の歴史 加藤 茂孝(著) 丸善出版 (2013/3/27)